

古墳時代 朝鮮半島との交流の玄関口「若狭」を再度訪ねる 2011.8.30.

脇袋古墳群など若狭の王墓からの出土品見学 & 若狭小浜港・遠敷(おにゅう)の里 Walk



古代 大陸・朝鮮半島への窓口だった若狭



若狭 天然の良港 小浜港 2011.8.30.

まだ日本で鉄が生産できない時代 朝鮮半島の鉄を求めて、朝鮮半島に近い北部九州諸国や、玉加工など特産品の生産に使われる鉄工具などの鉄器需要の大きかった山陰・丹後や北陸などが、朝鮮半島や北部九州と交易を行い、古墳時代当初 それらの諸国が畿内・大和への日本海側交易の窓口でもあった。

その後 5世紀 鉄の需要拡大と共に天然の良港であり、国内交通の利便性の面でも良好な「若狭」が流通拠点として畿内・大和への日本海側交易の窓口の役割を果たして行く。

最近 読んだ本に文言は正確ではないが、

「朝鮮半島の鉄を求める畿内・大和の日本海側交易の窓口は当初 丹後や山陰・北陸など。そして その後 若狭に移る。

丹後などは、流通拠点というより、鉄の消費地。その後 鉄の需要拡大と共に 国内交通の利便性の良い若狭に移った」と。

日本黎明期の古墳時代 大陸・朝鮮半島と大和を結ぶ「和鉄の道」の日本海側の玄関口「若狭」の実像のイメージを膨らませたくて、再度 若狭を訪ねてみよう 8月30日 再度若狭を訪ねました。

「若狭」は古代 大和・畿内から北部九州・大陸・朝鮮半島を結ぶ交易ルートの窓口。

3世紀 邪馬台国の時代から朝鮮半島の鉄を求めて「和鉄の道」が通っていたに違いなく、数々の朝鮮半島との交流を示す遺物や鉄製品遺物が残されている。この「若狭」の国の中心が若狭町上中地域(旧上中町)で、若狭の王墓とみられる数多くの古墳が築かれ、大和との結びつきを示す前方後円墳も数多く残されている。

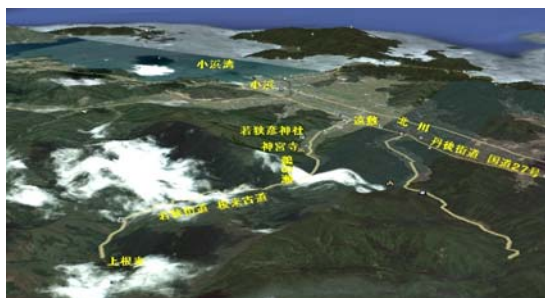
以前にもこの地を訪れたことが、あるのですが、今回この上中地域の古墳群から出土した遺物特に朝鮮半島との交流の歴史を示す遺物を見たくて、若狭町歴史文化館を訪ねました。

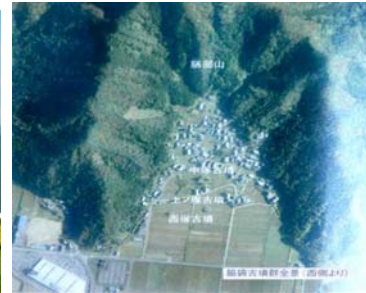
また、奈良東大寺2月堂のお水取りで汲まれる「若狭井」の水は若狭からの湧水とする伝承の里「遠敷(おにゅう)の里」そして、大陸・朝鮮半島の日本海側の玄関口「若狭の湊」のイメージをはっきりしたくて、若狭・小浜の港を訪ねました。

今回の若狭再訪で、1500年前 東アジア交流の真ただ中、国際的な海の玄関口として「若狭」がもっとも輝いた時代鏡のような穏やかな広い内海を持つ巾着型の小浜の港の良さ・若狭の王墓 前方後円墳から出てきた鉄ならびに朝鮮系の遺物の数々。そして、数々の文物・技術を持つ渡来人がこの若狭から大和へ登って行ったことを示す遠敷川 鵜の瀬の伝承等々

大陸・朝鮮半島から大和へつながる交流路「若狭」の姿を知ることができました。

もやもやしていた若狭の実像が浮かび上がってきて 我ながらびっくりです。



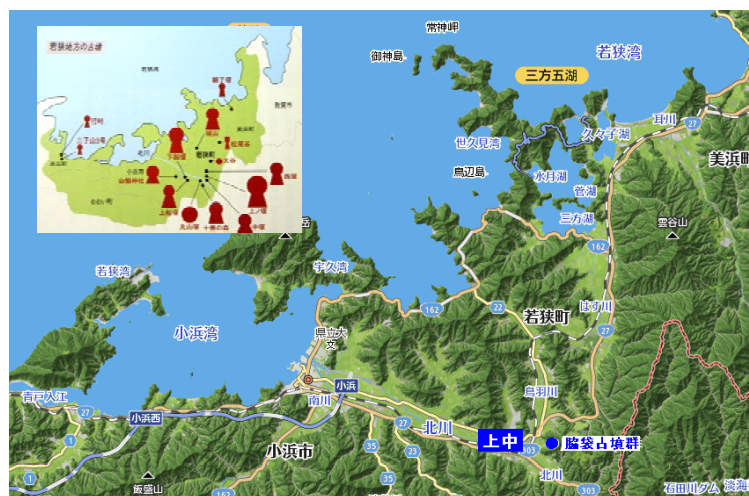


若狭町上中の膳部山麓 脇袋にある 日本の黎明 古墳時代 若狭の王墓 脇袋古墳群

5世紀初 若狭で初めて造られた前方後円墳 上ノ塚古墳ほかかつて七つの塚が存在したという。

現在では、その内、主軸をほぼ南北にした3基の前方後円墳、円墳と思われる糠塚古墳、埴輪と葺石を備えた上下の森古墳などが残っている。古墳群の背後に、標高約200mの膳部山がひかえ、若狭の国造膳臣（かしわでのおみ）との縁を今に伝えているといわれている

弥生時代後期末から古墳時代への移行期（2－3世紀）日本黎明の時代、日本各地には邪馬台国はじめとする地域王権・国が興り、この時代の先進地であった大陸・朝鮮との交流が進む。この時代 若狭をはじめ日本海沿岸でも共同体の規模が大きくなり、王が台頭し、その指標となる墓制の変化が見られ、丹後半島では、方形台状墓から大型前方後円墳の造営が見られた。また、北陸・越前では、四隅突出型墳丘墓から前方後円墳または前方後円墳の造営があった。



そんな日本黎明の弥生後期から古墳時代 大和・畿内から大陸・朝鮮半島や北部九州への交流路として、瀬戸内海と日本海沿岸を北部九州へたどる2つの道があったといわれ、「丹後」そして 少し下って、「若狭」が日本海側交流路の窓口となって活発な交流が行われたと言われる。この若狭の国の湊の中心「遠敷（おにゅう）の里」には 奈良東大寺二月堂の「お水取り」に先立って「水送り」の神事が行われる遠敷川鵜の瀬の伝承がある。

若狭・遠敷に行くまで 知らなかったのですが、インドの高僧と大寺建立 そして 大仏建立に力を尽くした良弁が登場し、ひょとして 和鉄の道が絡んでいるのではないかと頭にあったイメージが大きく膨らみました。

海と川と森の自然に包まれた若狭がもっとも華やかだった時代のイメージWalk。

前回の若狭 walk と一つにして まとめました。



鵜の瀬 「水送り」の神事

奈良東大寺2月堂お水取りに先立ち
若狭の水を 川に注ぎ 奈良 若狭井に送る
この瀬の中央の所に深い穴があり、
奈良若狭井につながっているとの伝承

1. 2008.9.1.Walk の記録 若狭「上中 熊川宿 & 脇袋」

<http://www.infokkna.com/ironroad/2008htm/iron4/0810wksa00.htm> より抜き出し整理

5世紀 大和と結ぶこの地を治める王の墓群「脇袋古墳群」 若狭ではじめて築かれた前方後円墳・前方後円墳



卑弥呼の時代からの大陸への玄関口 若狭・北近江の「若狭街道」

9. 大陸・朝鮮半島の鉄をもとめて続く若狭・北近江の「和鉄の道」を訪ねる 2008.9.1.

分水嶺「水坂峠」の両側にある北近江「高島 熊野本」と若狭「上中 熊川宿 & 脇袋」

0810wksa00.htm 2008.10.1. By Mutsu Nakanishi

「2. 若狭「上中 熊川宿 & 脇袋」の項 抜き出し

日本海に面する「若狭」は大陸・朝鮮半島と畿内・大和を結ぶ「古代 大和の和鉄の道」の北の玄関口
この道を通して 多くの渡来人そして「鉄」や文物が行き来した。この琵琶湖北岸から若狭へ山越えする「若狭街道」周辺には 数々の渡来人の痕跡や大陸・朝鮮半島の鉄の遺物が点在する

また、大和王権はいち早くこの鉄の供給路・大陸との交流路を確保のため、この地の「王」と結び、そんな証として、古墳時代初期のこの地の「王」たちの王墓 である前方後円墳・前方後円墳が数多く築かれた。

日本で製鉄が始まる前夜 そんな大陸からの鉄の流入路の夢を頭に描いて「若狭街道」を訪ねました。

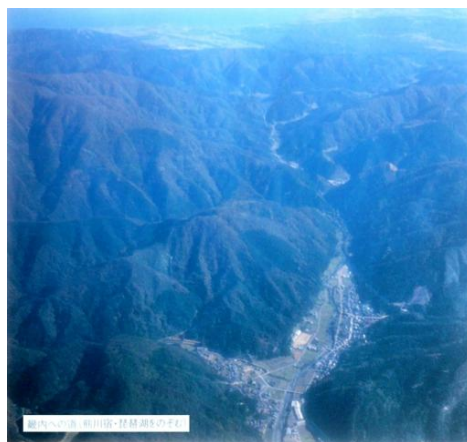
<http://www.infokkna.com/ironroad/2008htm/iron4/0810wksa00.htm> より

若狭 若狭町 上中町 脇袋「脇袋古墳群」 5 世紀

若狭から北近江へ遡る北川右岸の丘陵地に大和との密接な連携を示す初期前方後円墳 若狭の王墓古墳群が築かれている。

大陸への「鉄の道」の北の玄関 若狭にあるこの地に築かれた前方後円墳の王墓群。

大和がこの若狭を大陸と大和を結ぶ交易拠点として、強く意識していたことが見て取れる。



ずっと 頭にあった日本海沿岸から若狭そして琵琶湖へと続く畿内・東国

への鉄の流入路。朝鮮半島の鉄を求める古代大和王権の重要な「鉄の道」である。

北近江の琵琶湖へ西の比良山塊から流れ下る安曇川の北岸 饗庭野丘陵の南端にある弥生の高地性集落「熊野本」に鉄素材や加工の痕跡のある鉄が出土しているという。そして、その後この地に地域の首長が存在し、前方後円墳など大型の墳墓群を築いたという。

電話やインターネットで調べても 詳細は良くわからない。

大陸・朝鮮半島への玄関口 若狭街道の要衝の地にあるこの熊野本遺跡・熊野本古墳群はどんなところだろうか・・・
出土した鉄素材はどんなかたちのだろうか・・・。

現地に電話して、照会するのですが、雑木林に覆われた丘陵地を別荘地として開発した場所で、遺跡は残っているが、草に覆われ、行っても何もなく、整理された資料も現地にはないという。情報は滋賀県埋蔵文化財センターの簡単な学習シートとみ。場所は新旭駅のすぐ近く 西側の丘陵地の上の弥生の高地性集落。この集落が消えた後、この地域を治める首長が小さな谷を隔てた隣接地に次々とこの地の首長が大和との密接なつながりを示す前方後円墳や大型墳墓を築いたという。

この琵琶湖北岸から西岸にかけ、比良山系の山中には鉄鉱石があり、数々の渡来人の痕跡とともに「鉄」関連遺物が数々出土している。また、対岸には日本で一番先に製鉄を始めた先進地のひとつ 牧野や古橋に古い製鉄遺跡群が残るこの北近江。弥生時代にも きっと重要な鉄の痕跡があり、日本での製鉄の始まりにも大きな役割を演じたのではない・・・
「鉄」の流れを紐解く上で、欠くことのできぬ所だろう。

とにかく どんなところか 見に行こう。

本当にどんな鉄素材が出土したのかも知りたいと。

今年の夏 若狭の縄文時代の貝塚「鳥浜貝塚」を訪ね、この地の縄文人が丸木船を駆使して、日本海沿岸の集落と広く交流していたことを知りました。また、この若狭の地は 古代大和の時代には 瀬戸内海と並ぶ日本海沿岸から若狭を玄関口。

琵琶湖から大和へ結ぶ大陸・朝鮮半島との重要な交流路。まだ鉄素材を作れなかった日本への朝鮮半島の鉄の流入路。「鉄の道」である。

瀬戸内海経由と並ぶ最重要路「大和の鉄の道」 今も「若狭街道」の名で若狭と近江・京都を結ぶ重要路。

この街道を近江から山越して日本海側の若狭平野の出た処 若狭上中町脇袋に古墳時代初期の前方後円墳や前方後方墳が築かれ、大和と密接な関係が残されていることも知りました。(脇袋古墳群)

古代大和に先立つ卑弥呼の時代 北九州諸国に独占されていた朝鮮半島・大陸の「鉄」の独占支配が崩れ、山陰諸国 鳥取の妻木晩田遺跡 青谷上寺地遺跡や丹後にも大量の鉄が蓄積され、畿内にも鉄が流入する。

もう 一度 北近江の鉄を調べたいなあ 北近江牧野や古橋の古い製鉄遺跡群ばかりでなく、きっと この「近江・若狭を結ぶ若狭街道」にもそんな時代の「鉄」の痕跡があるだろうと・・・。

以前、朝日新聞関西版に「鉄器登場」や「日本の原像」にこの北近江若狭街道に近い拠点での前方後方墳など古墳時代の初期の大型墳墓群(熊野本古墳群)が紹介されていた。また確かその時に調べた、読売新聞の連載資料にも鉄と若狭街道地域に何か書かれていたと。再度 朝日新聞関西版「鉄器登場」や「日本の原像」の記事を引っ張り出すと、
「北近江の琵琶湖へ西の比良山塊から流れ下る安曇川の北岸饗庭野丘陵の南端「熊野本」にある 弥生の高地性集落「熊野本遺跡」と古墳時代初期 前方後方墳墓など大型墳墓群のスタートを示す「熊野本古墳群」。大量の鉄素材が出土し、この地で鉄器加工をやっていた可能性がある。」と紹介されている。



「北近江高島 熊野本遺跡と熊野本古墳群」については 下記の元の掲載記事をご参照ください。

9. 大陸・朝鮮半島の鉄をもとめて続く若狭・北近江の「和鉄の道」を訪ねる 2008.9.1.

<http://www.infokkna.com/ironroad/2008htm/iron4/0810wksa00.htm> より

日本海沿岸 若狭側の入口にある古代大和と結ぶ首長級の古墳群 脇袋古墳群を訪ねる



古代 大陸・朝鮮半島と畿内・大和との重要な交通路 若狭・北近江・琵琶湖を結ぶ若狭街道



5世紀若狹の王墓群 脇袋遺跡のある上中脇袋の郷
京・琵琶湖から水坂峠から若狹へ越えた 北川流域
若狹町上中は古墳時代若狹の中心地
大和との密接な関係を示す王墓 前方後円墳が数多く残る

新旭駅から約 5 分で近江今津。古くから西近江 琵琶湖交通の要で、この港と若狭街道を經由して 日本海と近江・大和・
が結ばれる。湖西線近江今津駅から新快速電車に接続して 1 時間に 1 本の若狭街道を通過して若狭小浜線の上中駅から小浜駅へ
約 1 時間で結ぶ路線バスがある。今は湖西線を新快速電車が敦賀まで走っているの、敦賀から小浜線で若狭へ行くことも
できるが、若狭へはこの路線バスを利用する方が、はるかに早く便利である。若狭街道は近江今津からまっすぐ若狭と近江の
分水嶺水坂峠へ石田川を遡り、峠を越えて若狭側の北川水系を真っ直ぐ、上中町・小浜へと下ってゆく。

航空写真で見るとこの若狭街道の道筋は中央構造線が走る四国吉野川水系や紀伊紀ノ川水系と同じく直線的に切れ落ちた断層地溝帯の中なのだろう、海岸まで直線的な地溝。距離的にもストレートの短い最短距離。

縄文・弥生の時代から日本海側から近江・琵琶湖へ抜けるこの地溝帯の道を知っていて、多くの人たちがこの道を往来した。大陸・朝鮮半島の「鉄」もこの道を通して近江へもたらされたに違いない。若狭街道は「鉄の道」である。

当時日本では鉄素材を作ること出来ず、朝鮮半島にその供給を求めた。当初 北九州の諸国に独り占めされていた「鉄」が、弥生の中期・後期には日本海側の山陰・北陸で急増し、そして 大和にも数多くの鉄器が持ち込まれ、この鉄器の力を背景に大和王権が支配を強めてゆく。この鉄の供給ルートが北九州諸国の手から離れ、日本海ルート・瀬戸内ルートが確立されてゆくとともに大和王権が形作られてゆく。若狭街道は日本海側から大和への「鉄の道」の北の玄関口である。

水坂峠を挟んで、近江側には弥生時代 鉄器とともに多数の鉄素材が出土した熊野本遺跡があり、そして、その後、古墳時

代になると同じ地に大和と結ぶ地域の有力皇族が前方後方墳・前方後円墳をつくり、この地を固める。(熊野本古墳群)

一方、近江から北川沿いに下ってくる若狭街道が山並みを抜け海岸沿いの平地に出たところに位置する上中町にもそんな遺跡が残されている。この北川流域を支配した地域豪族が現れ、この地に次々と古墳を築いた。

中でも、5世紀 上中町北川の北岸の山裾「脇袋」に築かれた脇袋古墳群はこの地に築かれた前方後円墳の最も古いものであり、大和と密接につながっていたことをこの前方後円墳が示している。

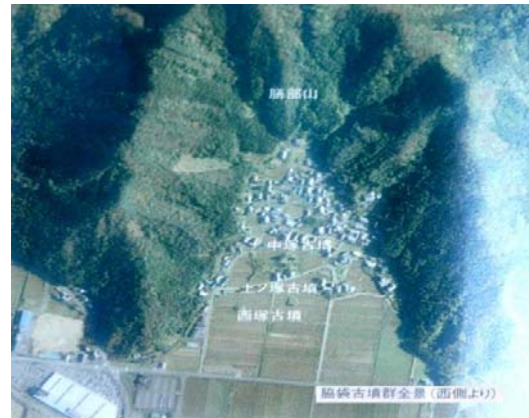
背景に大陸から持ち込まれてくる「鉄」があったに違いない。



若狭国の王墓 脇袋古墳群が膳部山の山裾に見える脇袋の郷 若狭街道の若狭側の出入口 若狭上中



若狭地方の主要古墳位置図



若狭で一番古い前方後円墳が築かれた上中町脇袋

近江からの出口上中町に古墳が集中

若狭街道の若狭側と近江側の出入口に大和と結ぶそれぞれの地域首長がどっしりと勢力を伸ばし、この交易路を行き来する文物を管理する。大和がこの「鉄の道」を非常に重要視していた証だろう。そして この道は古代ばかりでなく、現在に至るまで、その後も日本海側と近江や畿内・大和 そして京都を結ぶ重要路でありつづける。

また、近世の若狭街道・京街道のなごりとして、峠下に熊川宿の家並みが歴史的家並保存地区として残っている。琵琶湖岸の近江今津駅からバス に揺られて 若狭と近江の分水嶺水坂峠を越えて約40分ほどで熊川宿。



若狭街道を若狭湾へ流れ下る「北川」



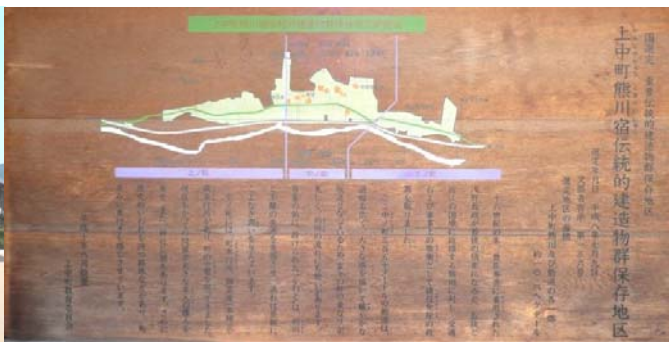
水坂峠から若狭に入ったところが熊川宿

蛇足ながら 近江と若狭の分水嶺は「水坂峠」であるが、県境は少し西へ下った「熊川」の入口にある。分水界が県境になっているのに、水坂峠周辺のみだけが、峠を越えて若狭側に食い込んでいる。これも 近江・畿内側の勢力が強く水坂峠周辺を近江側に位置づけておきたかったのかもしれない。街道筋が重要な地であった証拠でもあろう。

1. 2. 歴史的家並保存地区 若狭街道 熊川宿 2008. 9. 1.



若狭街道が水坂峠を越えて若狭に入ると熊川宿 街道に沿って 北川が海岸へ向かって流れる 2008. 9. 1.



水坂峠から北川に沿って若狭街道が日本海へまっすぐ下ってゆく
山間部を抜け平地に出るところに熊川宿が昔の家並みのまま残っている 2008. 9. 1



重要伝統的建物群保存地区
熊川宿 2008. 9. 1.

1.3. 5世紀 大和と結ぶこの地を治める王の墓群「脇袋古墳群」

若狭ではじめて築かれた前方後方墳・前方後円墳群



若狭で最初の前方後方墳・前方後円墳群築かれた若狭の王城の地 脇袋の郷 膳部山遠望



熊川宿をゆっくり歩いた後、午後2時過ぎの小浜行のJRバスで小浜線上中駅へ。

バスは日本海沿岸に向かって田園地帯が広がる中をまっすぐ走る。

15分ほど北川沿いに下って、山裾を抜けて平地に出た北川の中流で、右手 東から敦賀から走ってきた JR 小浜線や国道を合流する。この合流点から1km弱 下ったところが上中駅でここでバスを下車。

若狭街道・小浜線はそのままさらに北川沿いを日本海への出口小浜へ向かう。

5世紀この若狭北川流域を支配した首長たちが築いた前方後方墳・前方後円墳を築いた往生の地「脇袋」は 先ほどの合流点から反対に敦賀の方へ1kmほどいった北川右岸の山裾である。



熊川宿からまっすぐ北西へ北川沿いを走る
北川の対岸 右手の山々の山裾が脇袋



上中駅近く敦賀からの道との合流点
右手から敦賀からの道を合流すると JR 上中駅

JR 上中駅で脇袋古墳群のある「脇袋」への道を確認して歩き出す。

脇袋の郷は駅から約5km 敦賀よりの北川対岸の山裾。先ほどバスで通過した敦賀との道との合流点を敦賀の方へ進み、北川を渡って山裾の中へ回り込んだところが脇袋の郷である。

国道沿いに脇袋の郷のお寺への石塔が立っているからすぐわかれると聞く。

車がひっきりなしに通る国道を避けて、小浜線を渡って反対側にでると「脇袋」のある山の山裾まで黄金色の田園が延々と続いている。交通の便がないので、歩くより仕方なし。

JR 上中駅の北側に出ると流れ下る北側沿いに 西の小浜側から東の三方・敦賀側へ広大な秋の実りをつけた田園が広がる田園の中を 30分ほど歩いて、小浜線鉄橋・国道橋のそば 北川の土手に登ると 上流側に先ほどバスでくだった若狭街道の田園地帯が若狭・近江国境の山々を背に広がっている。そして、近江／若狭 国境の山々を背にとうとうと緑の中を流れ下る北川。この景色が若狭街道の出入口の昔から変わらぬ光景なのだろう。



西小浜側に広がる田園地帯



東三方側に広がる田園地帯 遠くの山裾が脇袋



北若狭街道熊川宿方面遠望 2008. 9. 1.

土手から国道の橋に出て 橋を渡って北川の右岸にでる。

右手に随分近くになった膳部山をながめながら、ゆるいカーブを描きながら橋から下ってゆく国道をお寺の石塔を見落とさないように注意して歩く。

橋から 15 分ほどで、石塔のある T 字路。石塔の横に「脇袋古墳群」の案内板も立っていて、凹字にくぼんだ膳部山の中央部へ田園の中をまっすぐな道が続き、

その懐に脇袋の集落がみえる。集落の家並みと古墳がかさなっているようで、ここからは古墳がどれか良くわからないが、集落の手前に見える森が古墳かも知れぬ。



国道から脇袋の郷へ入る入口で 田園地帯の奥 膳部山の凹字型の山裾に脇袋の集落がある 2008. 9. 1.

国道の T 字路から、田園の中を山に向かって まっすぐの道を進むと脇袋の集落。

集落は膳部山の山腹で凹字型に囲まれた山裾の傾斜地にへばりついて家々が密集しており、その前面に広く田園が広がっている。

古墳群はこの集落の中や集落に近い田園部に点在。

また、集落の一番奥に国道に石塔があったお寺があった。



いずれも民有地なのだろうか、古墳の上が畑になっていたり、一部が取り崩されて形が大きく変化している古墳や集落の中の民家の庭にあるものなど色々である。

でも この集落は裕福なのだろう。一つ一つの家が大きく、古墳も形が崩されてはいるもののきれいに整備されて残されている。また、静かで落ち着いた集落 これが 5 世紀の若狭の王墓群とともに暮らしてきた証のように感じた。



5 世紀の若狭の王墓群とともに暮らす脇袋の集落 2008. 9. 1.

〔若狭で築かれた最初の方後円墳古墳群 脇袋古墳群〕

北川の北岸 古代大和の鉄の道をおさえる若狭首長墓群 脇袋古墳群 5 世紀

若狭町 上中町 脇袋 2008. 9. 1.





脇袋の郷より 西の日本海側を望む



この脇袋は近江・福井の分水嶺から流れ出た北川が山間部から平地部へ流れて出たところの北岸の山裾にあり、この地から北川を下れば、朝鮮半島・山陰・九州への航海の玄関口若狭湾 また、北川沿いを南へたどれば、近江から琵琶湖そして大和・東海である。大陸への大和の北の玄関口。



その玄関口を守ったのが、脇袋の古墳群に眠るこの地域の首長たち。若狭の国造 膳臣(かしわでのおみ)一族といわれる。

今回 この地の首長たちと鉄との直接的なつながりを調べられなかったが、当時の最大の交易品は朝鮮半島の「鉄」であり、朝鮮半島諸国ともっとも交流の盛んだった時代である。大和の最も重要な地点のひとつであったに違いない。確かにそんな重要路を守る位置に大和と密接に関係を持った首長がいた。朝鮮半島の「鉄」と大和の関係を浮かび上がらせる鉄の道が若狭街道だとより鮮明に感じている。 ずっとあたまにあった若狭街道と鉄の関係 やっとやっと歩けたこと、そこに確かな鉄の痕跡が残っていることに満足。

夕日で真っ赤になった西の空 海は見えないが西に開けた若狭の王城の地を強く感じながら、上中駅へ急ぐ。

帰りは さらにバスに乗って若狭街道を走るバスの終点小浜駅へ。そして、小浜線で敦賀へ出て敦賀から米原経由の新快速電車姫路行に乗り継いで神戸へ。神戸に帰り着いたのは夜 10 時過ぎ。若狭街道から近江今津経由で神戸に帰るのとは 1.5 時間近く時間がかかった。 やっぱ、近江・若狭をつなぐ道は今も地域をつなぐ重要路とつくづく感じます。

2008. 9. 1. 夜 神戸に帰りついて Mutsu Nakanishi

【和鉄の道】 9. 大陸・朝鮮半島の鉄をもとめて続く若狭・北近江の「和鉄の道」を訪ねる 2008.9.1.

<http://www.infokkna.com/ironroad/2008htm/iron4/0810wksa00.htm> より 抜き出し整理

2. 古墳時代 朝鮮半島との交流の玄関口「若狭」を再度訪ねる 2011. 8. 30.

若狭町歴史館に 若狭国の王墓「脇袋古墳群」より出土した鉄製品を訪ねる



古墳時代 まだ 日本で鉄が生産できない時代 朝鮮半島の鉄を求めて、朝鮮半島に近い北部九州諸国と共に国の特産品である玉加工などに使われる鉄工具など鉄器需要の大きかった山陰・丹後や北陸などが、畿内・大和への日本海側交易の窓口でもあった。そして、その後 鉄の需要拡大と共に 天然の良港であり、国内交通の利便性の面でも良好な「若狭」が流通拠点として 畿内・大和への日本海側交易の窓口の役割を果たして行く。[5世紀]

この時期 若狭の王墓には大和との密接な関係を示す前方後円墳が築かれる。

2008. 9月 に この「若狭国」の中心が若狭町上中地域(旧上中町)にある若狭国の王墓 脇袋古墳群を訪ね、大和との強い結びつきを示す前方後円墳群に、朝鮮半島と大和を結ぶ「和鉄の道」の日本海側窓口としての役割を強く印象付けられました。

しかし、実際に若狭の古墳群から出土した遺物 特に 鉄製品や朝鮮半島との交流を示す遺物などを見られなかったのと、かつての若狭の中心 若狭町上中地域は小浜へ北川が流れ下る山郷のイメージが強く、港とつながっているイメージがあまりはっきりしませんでした。今回 この「和鉄の道 古墳時代の朝鮮半島交易の窓口・鉄の玄関口「若狭」 朝鮮半島の鉄を求める大和の日本側窓口」のイメージをもう少し、はっきりしたものにしたいと、8月30日早朝神戸を出て、若狭・小浜を再度訪ねました。

いつも「若狭」へは京都へ立ち寄ってから行くのですが、今回は神戸からダイレクトに舞鶴自動車道を通して神戸から約2時間 西側から若狭小浜に直接入る。

入り組んだ入江が続く若狭湾のその中にある小浜の港に行くと、それから かつての若狭の中心若狭町上中地域へ若狭の国の王墓 脇袋古墳群から出土した朝鮮半島交易遺物を見る。鉄遺物はみられるだろうか……

朝鮮半島から持ち込まれた鉄がどんなものなのか…… 5世紀後半と言われる日本での製鉄の始まりを考えるヒントが見つかるかもしれない。大和王権と結びついた「若狭国」が朝鮮半島交易の窓口として果たした役割のイメージを膨らませて帰りたい。

また、奈良東大寺二月堂の「お水取り 若狭井」に湧き出しているとの伝承がある「遠敷川 鵜の瀬」にも興味がある。



舞鶴自動車道 綾部 私市古墳を潜り抜ける



由良川を渡り 海岸には出ずに山中 舞鶴を抜ける 2011.8.30

1. 若狭 小浜の港



若狭湾は海岸部まで山が連なる典型的なリアス式海岸で 海岸部まで東西に延びた山地が迫るが、入江は天然の良港となり、海岸や山あいを流れ下る川の流域にできた河岸段丘などに縄文時代から人が住み着いてきた場所。そして、小浜は若狭湾の中央部の小浜湾に東南部から山間を流れ下ってきた北川、南川、多田川の三つの川が並んで注ぐ かつては深い入江だった海岸部とそれらの川の流域に開けた平地でできた町で、東の舞鶴 西の敦賀と共に若狭の中心的な港である。

舞鶴自動車道が由良川を渡ると自動車道の終点 若狭小浜は近い。 若狭湾に並行して山間を東へ走るので、海岸部がほとんど見えない中 幾つか トンネルをくぐると ぱっと 街並みが広がり、終点の小浜 IC である。いつもは京都から若狭街道を遡って 東から小浜に来るので、町の位置関係がよく判らない。 案内標識を見ながら海岸方向へ市街地に行く。

途中の案内標識でやっとイメージが判る。いつものことながら、まず小浜駅に行って 案内図をもらって それから港へ。

狭い街なのでどこへ行くのもすぐなのですが、山が迫って街中に入り組んでいるので、道がややこしい。

記憶にある魚の卸売市場の横に出てほっとする。 まず、一目散に岸壁へ 小浜の港を見に行く。



若狭湾の奥 さらに小浜湾の中小浜港 波ひとつたため静かな海が眼前一杯に広がっている。

岸壁からぐると北側に開ける小浜湾を眺める 2011. 8. 30.

若狭湾の内海 小浜湾の中にある小浜の港 両側を突き出た半島が湾を絞込み、正面の出入り口にまで西側の半島の先が横たわり、日本海の荒波と風から小浜の港を守っている。 これは もう湖の延長。 小浜の港が深い入江の奥 天然の良港で しかも 湾全体が広い港と言えることがよく判る。この安全な港で風を待ち、潮を待って 日本海へ漕ぎ出し、また帰ってきたであろう。 海外からも多くの人がこの地を目指してやってきたに違いない。

日本海沿岸や陸路琵琶湖・畿内・大和などから多くの人や物が集まり、交易し、また 日本各地 そして当時の先進地 北部九州・朝鮮半島や大陸を結ぶ通商路が成立していたに違いない。その中心は諸国の特産・物産と朝鮮半島の鉄 和鉄の道の中心であったに違いない。



港に続く西の砂浜海岸 白鳥海岸にある白鳥のモニュメント 2011. 8. 30.

港に続く西の砂浜海岸 白鳥海岸の公園には この港から大陸へ大きく羽ばたく白鳥のモニュメントもありました。

岸壁ではそんな歴史とはうらはら のどかな港 数多くの人たちが岸壁で釣りを楽しんでいます。

港の海岸通りから一筋街中に入ると古い家並みが残っていました。 この間古い街並みの通りには丹後街道の標識があり、往時を思い浮かべる古い街道筋の家並でした。

何度か訪れたことがある小浜ですが、じっくり港や街並を見たのは初めてでした。



小浜西組 伝統的建造物群保存地区界限

昔から栄えた小浜の港のイメージが自分なりに出来たので、若狭町上中地域へ向かう。若狭町上中地域は小浜とは地続きで幹線の広い国道・小浜線が並んで走っていて、すぐなのですが、小浜の海岸部が見たくて、遠回りなのですが、国道27号へ出ずに小浜の東側海岸に沿って 国道162号を通り、山が連なる海岸側から上中地域に行くことにする。 道は少し走ると道はやっぱり、上に上がって海岸沿いの山腹を縫って走る。幾つもの入江がちらちら見え、そこへ降りる道を分岐しながら道で、小浜の海岸沿いにはやっぱり広い平地はなく、リアス式海岸の典型だなあ…と。



田島の海岸で国道から分かれ、右へ狭い山間のトンネルを抜けて上中地域への県道に行く。山を下るにつれ、田園地が視界に入り、まもなく左手から三方から小浜へ行く小浜線と並行して南へ。両側を山並みに挟まれてはいるが、広い田園地帯を南にくだる。

三方から小浜へ抜ける国道27号線に合流すると左手に見覚えのある脇袋の集落のある膳部山。 そして、そのまま国道27号線の北川の橋を渡ると南側から北川沿いを琵琶湖・朽木から北へ下ってきた若狭街道 国道303号線との合流点で、間もなく上中地域の中心地 小浜線上中駅。 そのすぐ前の所が、若狭町歴史文化館でした。



2. 若狭町歴史文化館で上中地域古墳群出土遺物展示を見る



若狭町歴史文化館は若狭町の歴史、文化をまとめて展示した資料館でその中心は 古墳時代 朝鮮半島の鉄を求めた大和が日本海側の窓口として密接に連携した若狭の国の王墓 脇袋古墳群ほか上中地域の古墳群から出土した朝鮮半島との交流を示す遺物や若狭の国の繁栄を示す遺物が数多く展示されていると聞く。

古墳時代 若狭が朝鮮半島の鉄入手とかかわる展示があるだろうか・・・ 是非見たかった資料館である。

この若狭町歴史文化館は小浜船上中駅と国道27号線を挟んで反対側の南側に一筋入った駅からも見える大きな3階建 若狭町役場上中庁舎の建物の東半分を使って作られている。2008年に脇袋古墳群を訪ねた時は時間切れで、見残した場所である。庁舎玄関脇の駐車場に車を止めて中に入ると1階が広い展示場で、上中地域にある古墳群から出土した展示品がこれら古墳群の解説と共に展示され、若狭の国がもっとも輝いた1500年前の古墳時代 若狭の国と大陸との結びつきについて常設展示している。(その内容は若狭町歴史文化館の常設展示図録にまとめられていました。)

「鉄関係の展示など一部デジカメ写真撮らせてほしい」と声をかけて、展示室に入ってゆく。

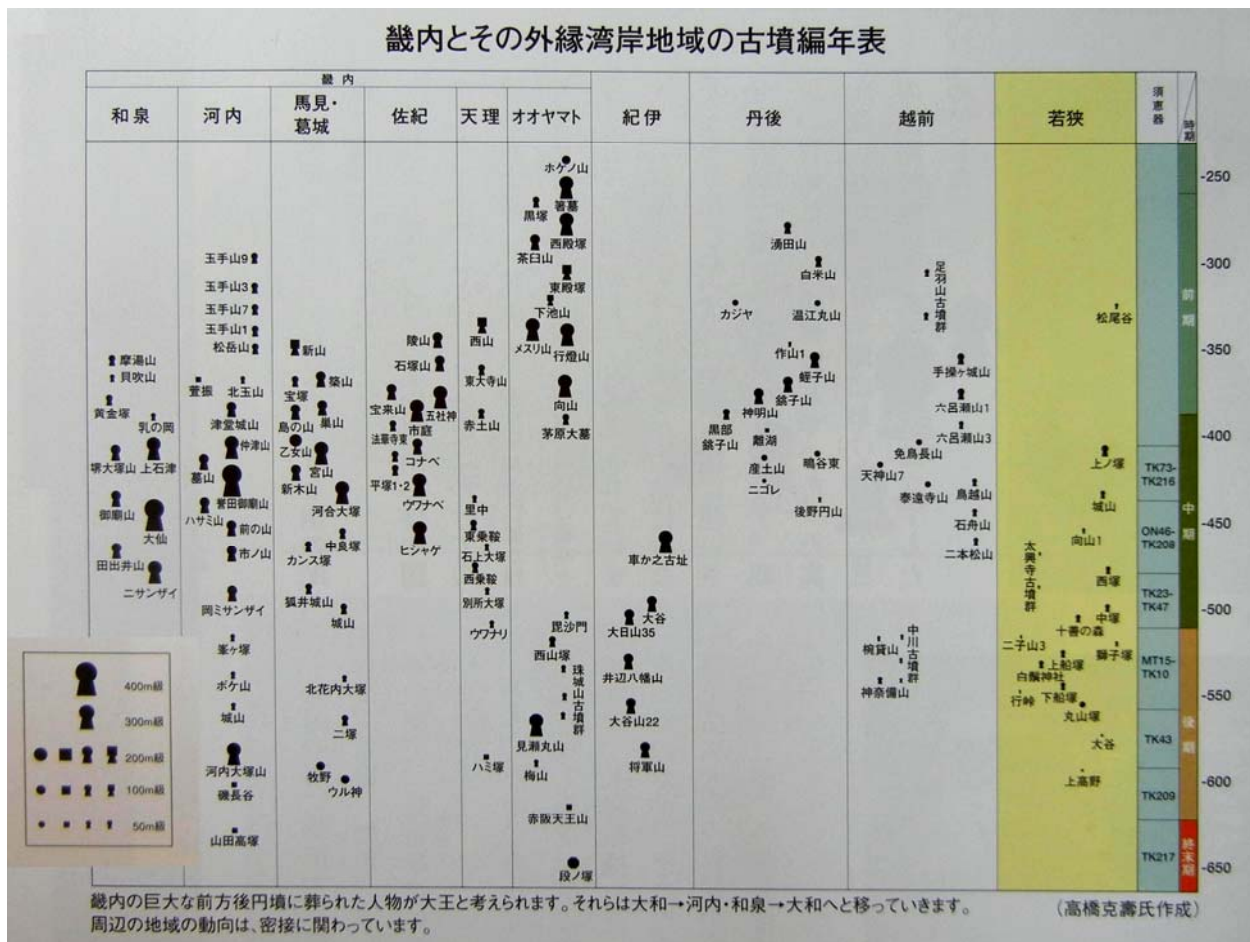
「若狭地方と大和政権」の解説パネルにはじまり、若狭で一番古い前方後円墳が築かれた5世紀の脇袋古墳群ほかこの上中地域にある古墳群の主要古墳をそれぞれ年代別に解説パネルが作られ、出土遺物がその前に展示されていました。



残念ながら 5 世紀の脇袋古墳群の古墳主体部は未発掘などで、この古墳群から出土した鉄器出土品などは見られずでしたが、ほかの古墳から出土した数多くの鉄遺物から、若狭の王などこの時代の首長にとって鉄器保有が重要な権威だったことが良く見える。また、前方後円墳の大きさと共に立派な葺石・埴輪などに大和との連携の強さも垣間見え、大陸への窓口であることを示す朝鮮半島系の遺物(数々の鉄製品 陶質土器片 金銅冠 轡などの馬具) や横穴式石室など先進的築造技術など朝鮮半島との交流も・・・。

一番先に眼が行ったのは古墳時代の和と若狭ほか周辺諸国の古墳築造年代と形態の変化推移比較図。

古墳の大きさや形態の変化から大和との距離感が大きく変化してくる様子がよくわかる。



4 世紀丹後や越前で先に前方後円墳が作られ、その後 5 世紀になって若狭での築造が始まるのが見て取れる。丹後では 5 世紀には前方後円墳がつくられなくなり、小さな円墳が築かれるのみで、その後消えてしまう。この時代 同時に若狭で前方後円墳の築造が始まり、6 世紀半ばまで続き、円墳の築造へと移る。

前方後円墳の築造が、独立国としての大和との同盟・連携の象徴とすると、その後の小さな円墳築造への移行は大和の支配下へ組み込まれたことを示すのだろう。

丹後や越前は玉作り工具などに鉄を使った鉄の先進地で、いち早く北部九州や朝鮮半島から鉄を入手していた。朝鮮半島鉄を求める大和は まずこの丹後・越前と手を組み、朝鮮半島交易のベースを作りつつ、さらに広範な大陸・朝鮮半島との交易・交流を求めて、交通の利便な若狭を窓口にしていったのではないかと見て取れる。

そして、若狭の国力が上がるにつれ、丹後の国力が衰退し、大和の支配下へ組み込まれていったのだろう。

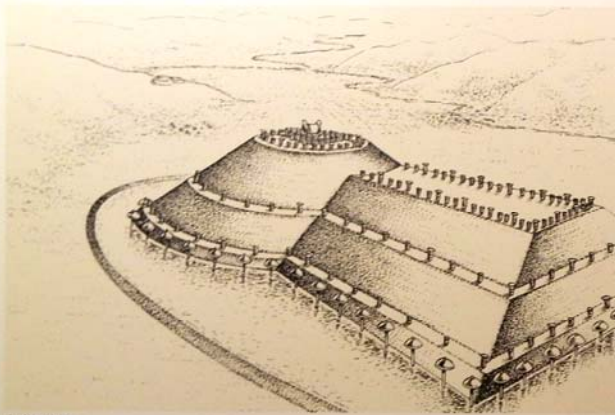
若狭町歴史文化館に来る前に 東小浜にある福井県立歴史民俗資料館で見た

「若狭沿岸の大型古墳と豪族の居館パネル展示」にも、

若狭・丹後の古墳群の変遷・特徴を判りやすく解説したパネル展示されていたので、下に概要表示しました。



若狭湾岸の大型古墳と豪族の居館



上之塚古墳



豪族の居館



若狭・丹後には合計50基余の前方後円(方)墳が散在しています。それらは全長約20～50mとやや小型で、各地域の歴代の首長墳です。ただ、規模が100mを前後する大型古墳は、墳丘を2～3段に構成する段築・斜面に石を葺いた葺石・墳輪(さらに一部では周溝も)など、

他の古墳には例の少ない諸設備を完備するので、地方の大首長墳と思われます。この種の大型古墳は、前・中期には丹後にのみ、その逆に中・後期には若狭・丹波・但馬にのみ分布することから、丹後に統合されていた若狭・丹波・但馬が中期に分れたとみなす説があります。



民衆の住居

村長の屋敷

古墳時代の一般民衆が竪穴住居に住んでいたことは従来から知られていましたが、近年遡をめぐらした居館や浅い小溝をめぐらした小型の屋敷地の発掘例が、各地で相次いでいます。すなわち、居館は大型前方後円墳を造営した豪族が、小型の屋敷地は小型の円墳や

方墳を造営した、民衆と豪族との中間層にあたる村長クラスが、それぞれが構えた住居と推定されます。つまり、墳丘の有無・規模の大小など墓に現れた格差と同様に、住居にも力の差が歴然としていることが明らかになりました。



福井県立歴史民俗資料館で 「若狭沿岸の大型古墳と豪族の居館」 パネル展示より 2011. 8. 30.

「丹後・若狭 どちらが 朝鮮半島交易のメインだったのだろうか」と考えていたが、この前方後円墳築造の変遷図を見ると4世紀の丹後から5世紀若狭に移って行ったと見て取れる。

なお、若狭の特産品「めのう細工」があり、若狭の鉄と玉造が関係するかと思いましたが、このめのう加工技術が若狭に伝わったのは奈良時代に玉を信仰する鰐族(王仁・わにぞく)が渡来し、遠敷(おにゅう)の郷に伝えたのがはじまり。

若狭の隆盛期からは時代が下り、やはり 天然の良港であり、また 大和・国内交通の利便性を有する日本海側の天然の良港であったことが、古墳時代の若狭の隆盛の基であろう。ただし、この若狭隆盛と時を同じくして 「御食国・若狭」として海産物そして製塩が若狭の特産として大和などへ送られたという。



食満遺跡出土の土器片



若狭 食満遺跡出土の土器片と若狭の古墳築造と製塩土器の変遷 若狭町歴史文化館展示より

【若狭町歴史文化館 上中地域の古墳群から出土した遺物】



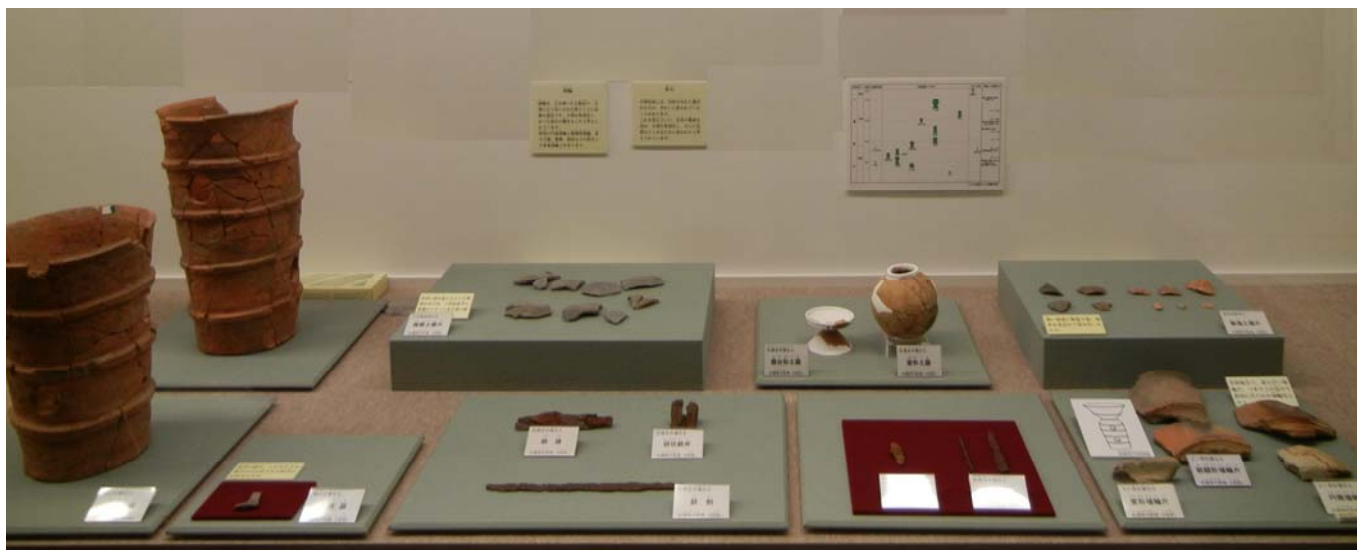
弥生時代後期末から古墳時代への移行期（2－3世紀）日本黎明の時代、日本各地には邪馬台国はじめとする地域王権・国が興り、この時代の先進地であった大陸・朝鮮との交流が進む。大和・畿内から文化・技術の先進地 大陸・朝鮮半島や北部九州への交流路として、瀬戸内海と日本海沿岸を北部九州へたどる2つの道があり、日本海沿岸では「丹後」そして少し下って、「若狭」が日本海側交流路の窓口となったと言われる。

このような国や首長・王の台頭は墓制の変化として現れ、丹後では、方形台状墓から大型前方後円墳の造営があり、北陸・越前では、四隅突出型墳丘墓から前方後方または前方後円墳の造営があった。

若狭地方の弥生時代後期末の墓制は、土壌墓または方形周溝墓が主流であったが、4世紀前半に松尾谷に前方後方墳が現れる。継続的な前方後円墳の築造は、5世紀初の上ノ塚古墳(脇袋古墳群)に始まり、5世紀半 城山古墳・向山1号墳そして西塚古墳(脇袋古墳群)から6世紀初めの十善の森古墳群を経て 上船津古墳 6世紀半ばの下船塚古墳まで、上中地域を中心に前方後円墳が築かれてゆく。若狭の国が大和と結びついて日本海交流路の窓口として栄える時期と符合する。

そして、6世紀中頃から従来の大型前方後円墳に変わり、丸山塚古墳や大谷古墳のような円墳が作られるようになり、大和政権の支配が強く及んだ結果と理解され、その後7世紀 国家としての体制を整えた大和の「国造」などの律令体制の中にくみこまれていったのだろう。この間 若狭は日本海沿岸・大陸・朝鮮半島への大和の玄関口であり続け、若狭は「御食国」として繁栄し、数多くの渡来人・文物そして「鉄」が若狭を経由して 大和・日本各地に広がっていった。

(若狭町歴史文化館の常設展示図録より拾い読み整理)



若狭の古墳出土品展示
4世紀～5世紀半

〔前〕 左 城山古墳出土土円筒埴輪 中央 松尾谷古墳出土鉄器 右 上ノ塚古墳出土埴輪片
〔後〕 左 三生野遺跡から当時の朝鮮半島の陶質土器 中央 松尾谷古墳出土土器 右 製塩土器片



5世紀半 向山1号墳の多彩な出土品

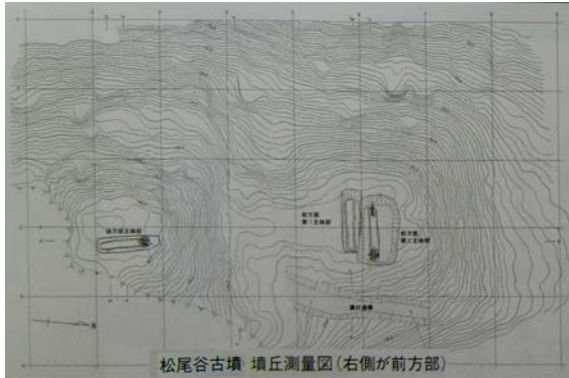


6世紀初 十善の森古墳出土遺物 多彩な出土品

● 4世紀前半の前方後方墳 松尾谷古墳



松尾谷古墳・前方後方墳（手前が前方部） 4世紀前半



古墳時代前期 4世紀 松尾谷古墳出土品
若狭町歴史文化館で

若狭で前方後円墳に先立ち4世紀前半に造られた前方後方墳 松尾谷古墳。

若狭町南前川字松尾谷の尾根にあり、若狭における最初の地域首長墳である。前方後円墳は初期大和政権との結びつきが少し弱いか 下位に位置づけられる場合の古墳形式であるが、大和政権と若狭との連携の始まりを示している。

主体部は3つ。それぞれ木棺が直葬され、出土したものとしてヤリガンナ・碧玉製管玉鉄剣、鉄槍、鉄鏃などが知られている。しかし、すでに水源建設の為、消滅しているという。

● 5世紀初めの前方後円墳 上ノ塚古墳 脇袋古墳群 若狭で最初に造られた前方後円墳



上ノ塚古墳 5世紀の前方後円墳 若狭地方最大の前方後円墳
全長 約90m 後円部径51m 高さ9m 前方部幅48m 高さ7m



上ノ塚古墳は、若狭における最初の大型首長墳で、周溝・墓石・埴輪を備え、3段築成である。



古墳時代前期 5世紀 上ノ塚古墳出土埴輪片
古墳主体部は未発掘なので副葬品など詳細不明

5世紀初 若狭で最初に造られた前方後円墳で、かつ 全長100m、後円部径64m(高さ9m)、前方部幅60m(高さ7m)で、若狭地方最大の前方後円墳である。

古墳の主要部である主体部が発掘調査されていないので、副葬された遺物は未調査である。この上ノ塚古墳からは家形埴輪片・円筒埴輪片・朝顔型埴輪片が出土している。

● 日本最古の横穴式石室 5世紀半の前方後円墳 向山1号墳

脇袋古墳群の西 1.5km の尾根上に造られた前方後円墳で、中規模ながら2段に造られ、葺石・埴輪を備え、日本最古の横穴式石室を持ち、韓国あるいは九州から伝わったと考えられている。

数多くの鉄器など多彩の副葬品が出土した。



古墳時代中期 5世紀 向山1号墳からの出土鉄製品 若狭町歴史文化館で



● 5世紀後半の前方後円墳 西塚古墳 脇袋古墳群



西塚古墳 5世紀後半の前方後円墳 古墳 脇袋の舞より 開けた北側を眺める 2008.9.1.



脇袋古墳群にある5世紀後半の前方後円墳で、竪穴系横口式石室を持ち、大陸の影響を受けた形態をしているという。

前方後円墳の中央部の土が剥ぎ取られ、現在は後円部と前方部を残すのみとなっているが、金製耳飾り・鏡・金銅製帯金具・銀鈴・銅鈴・馬具・靑など多彩な副葬品が出土。

● 数々の朝鮮半島系遺物が出土した6世紀初 前方後円墳 十善の森古墳



6世紀初の方前後円墳。後円部と前方部に形態が異なる横穴式石室が二基あり、両石室ともに壁面に赤色顔料塗布。墳丘から円筒埴輪が出土し、周濠をもつ。

後円部石室から流雲文縁方格規矩四神鏡、金銅製冠・履、玉類（水晶・ガラス製勾玉、金銅製帯金具、碧玉製管玉、ガラス製小玉・なつめ玉など）、武器、武具、馬具（鉄地金銅張双龍文鈴付鏡板、鉄地金銅張剣菱形鈴付杏葉、木心鉄板張輪鍔片など）などが出土。

伽耶産の金銅製轡とともに百済系の金銅製冠・履やとんぼ玉の出土が注目されている。



十善の森古墳出土遺物 多彩な出土品



百済系の冠・履の破片(十善の森古墳出土)

伽耶系とされる龍文鏡板(十善の森古墳出土)

● 6世紀前半 新たな日韓交流の始まりを示す十善の森古墳 (若狭町歴史文化館の常設展示図録より整理)

近年 朝鮮半島南西部の栄山江流域を中心に6世紀前半頃の方前後円墳群が発見され、若狭や北部九州同じ墳丘や石室を持つものがあり、高句麗の南下や伽耶(をめぐる新羅との)攻防などに対し、百済・倭双方が緊密な関係を結んだ結果の表れ。それまで、倭の五王は伽耶との関係を重要視してきましたが、6世紀になると百済地域の重要性が増し、若狭の王たちも北部九州・越前の勢力とともに積極的に対百済外交を展開。この動きが継体大王擁立の原動力になってゆく。

十善の森古墳では伽耶産の金銅製轡もでていますが、百済との交流開始を直接裏付ける百済系の金銅製冠・履やトンボが出土し注目されます。



(金銅製冠 復元)

(若狭町歴史文化館の常設展示図録より整理)

3. 若狭と大和の深い関係を示す 若狭 遠敷川 鵜の瀬の水送り 2011.8.30.



若狭でもう一か所湧きたいところがある。

大陸・朝鮮半島の玄関口若狭の水が奈良・東大寺二月堂の「若狭井」に噴き出している。

若狭国をそのままあらわすロマンに満ちた伝承である。

東大寺二月堂「奈良のお水取り」の「若狭井」とつながっているとされる若狭 遠敷川「鵜の瀬」。 毎年 東大寺二月堂の「お水取り」に先立って 若狭では「水送り」の神事が行われるという。

遠敷川「鵜の瀬」を地図で確かめて、若狭歴史文化館での若狭上中地域の前方後円墳群の展示を見学した後、国道24号線を少し小浜の方へ戻って、小浜市遠敷の里へ向かう。

「小浜市遠敷(おにゅう)」は南から遠敷(おにゅう)川が北川に注ぎ込む合流点に開けた街で、この遠敷川を南へ遡ると目的地の遠敷川「鵜の瀬」。この遠敷川を遡る道も古い若狭街道根来道 京・近江を結ぶ古道である。

「遠敷」と書いて「おにゅう」と読む難解な地名であるが、

古くから開けた地で、和銅5年(712)までは「小丹生」と書かれていたという。「遠敷」の言葉自体には朝鮮語の「ウォンフー」に由来するとの説もあり、また、古くは小浜市の大部分上中

地域を合わせて「遠敷」といい、「若狭国遠敷郡遠敷郷」などの文字が記された木簡が平城京跡などから出土。

古代若狭の中心地で国分寺 遠敷川に沿って 若狭一ノ宮 若狭彦・姫神社などがあり、特定はされていないが、国府があったと推定されている。

「若狭井」の伝承はしていましたが、遠敷川 お水送りの鵜の瀬 については全く予備知識なし。



【 若狭と大和の深い関係を示す 若狭 遠敷川 鵜の瀬の水送り 】



● 奈良東大寺二月堂で行われる「お水取り」

3月12日に奈良東大寺二月堂で行われる「お水取り」は1250年の長きに渡って守り続けられている神事で、「若狭遠敷川の鵜の瀬」から繋がっているとされる2月堂「若狭井」より「閼伽水」を汲み上げ本尊にお供えする儀式で、大和路に春を告げるである。

また、若狭小浜の神宮寺では、「お水取り」に先立つ3月2日、奈良東大寺二月堂へ水を送る神事「お水送り」が行われる。

● 史蹟「鵜の瀬」由緒記 鵜の瀬にある案内記板より

天平の昔、若狭の神願寺(神宮寺)から奈良の東大寺にゆかれた印度僧実忠和尚が大仏開眼供養を指導の後天平勝宝四年(753)に二月堂を創建し修二会を始められ、その二月初日に全国の神々を招待され、すべての神々が参列されたのに、若狭の遠敷明神(彦姫神)のみは見えず、ようやく二月十二日(旧暦)夜中一時過ぎに参列された。それは川漁に時を忘れて遅参されたので、そのお詫びもかねて若狭より二月堂の本尊へお香水の閼伽水を送る約束をされ、そのとき二月堂の下の地中から白と黒の鵜がとび出てその穴から泉が湧き出たのを若狭井と名付け、その水を汲む行事が始まり、それが有名な「お水取り」である。

その若狭井の水源がこの鵜の瀬の水中洞穴で、その穴から鵜が奈良までもぐっていったと伝える。

この伝説信仰から 毎年3月2日夜 この淵へ根来八幡宮の神人と神宮寺僧が神仏混淆の「お水送り」行事を行う習いがある。

神宮寺で汲んだ「閼伽水」を鵜の瀬まで夜中に運び、川にこの「香水」を流して 二月堂の「若狭井」に送る。

神宮寺境内の大護摩から松明に移した火を貰い受け、鵜の瀬まで約2キロ、三千人を超える松明行列が続くという。

奈良と若狭が昔から深い関係にあったことを物語る歴史的な行事である。

若狭の遠敷明神とは同じ遠敷川筋の下流にある若狭一ノ宮 若狭彦神社・若狭姫神社に祭られている

若狭の開拓神 若狭姫(豊玉姫)の神(& 若狭彦(山幸彦)という。

鵜の瀬には若狭一ノ宮 若狭彦神社・若狭姫神社の境外社 白石神社があり、

祭神は若狭彦神、若狭姫神を『白石大神』または『鵜の瀬大神』とたたえて奉祀し、若狭彦神社創祀の社と伝える。

また、神宮寺は奈良時代の初め、若狭一ノ宮の遠敷明神(若狭姫)の神願寺として創建されたことに始まるといわれ、さらに、若狭彦姫神を根来白石より迎え神仏両道の寺とした。

鎌倉時代に神願寺は遠敷明神上社(若狭彦)と遠敷明神下社(若狭姫)の別当寺となり、神宮寺と改称したとされている。

これらを遡るといずれもそのルーツは鵜の瀬「白石神社」で、この「白石」は「新羅」が転化したものとの説があり、この遠敷の里は大和・京との結びつきばかりでなく 朝鮮半島諸国とも強い結びつきがあったことがうかがえる。

上中の街並を抜け小浜へ国道24号線を少し戻る。

道の右手には中央に北川が流れる田園地 左手は小さな枝尾根が幾つも張り出す山裾を小浜へ向いて走る。枝尾根と枝尾根の奥に小さな集落と田園が見える。

そんな山裾を10分ほど走り、道の左手に家並みが見えだすと市場の集落。そして、右手国分寺の標識を過ぎるとすぐに遠敷川の橋。土手には「右県道35号」の道路標識があり、遠敷の里に入る。左手から流れ込む遠敷川にそって、街並みとその後ろに枝尾根の橋が見えている。

国道を左手の南に折れ、この川筋を山裾に沿って遡る県道35号線を遡れば、6km15分ほどで鵜の瀬である。



遠敷川に架かる橋より南 鵜の瀬方面



鵜の瀬に向かう県道35号の交差点 東小浜駅口

Googole Map による 国道27号線 遠敷の里

国道27号線 東小浜口の信号から南へ折れて、正面に見える山裾に沿って南へ県道35号線 若狭街道根来道に入る。

500m 走って山裾の傍に行ったところが遠敷神(若狭姫)を祭る若狭一ノ宮 若狭姫神社で、道から杜に包まれた社殿が見える。若狭姫神社の前の街並みの中を通りぬけて少し行くと ぱっと視界がひろがり、尾根筋の間を流れ下って来る遠敷川に沿う田園地帯がひろがり、正面にみえる山並みの入り口へ向かって、街道がまっすぐ伸びている。もう10分も進めば鵜の瀬である。

若狭彦神社・神宮寺の標識が街道筋を 左手山裾の森にある若狭彦神社への標識があるが帰りに寄ることにして さらに奥へ。



遠敷の里案内板



若狭姫神社



神宮寺の標識と奥の山並み 遠敷川の流れだし口

鵜の瀬への道 県道35号線 若狭街道 根来道

だんだん 道の両側の尾根筋が狭まり、右へ神宮寺の標識を過ぎると遠敷川がすぐそばを流れる谷間のゆるやかな登り道。

杉木立の中を山腹に沿ってぐると山裾をまいたすぐの道脇に沿って小さな公園が整備され、川岸に案内板が建ち、木の小さな鳥居から鵜の瀬の河原へ降りる入口 そして、南の上流側から 数m下を瀬になって清らかな水が流れ下って来る。

時折通る車以外誰もいない静寂に包まれた山間の川筋の景色。風がすう〜と通り抜けて心地よい。

ここが東大寺二月堂お水取りの若狭井とつながっているとのロマンの地「鵜の瀬」。



鵜の瀬の上流側



遠敷川 鵜の瀬 道路側 河原への降り口 2011. 8. 30.



鵜の瀬 上流側より 2011. 8. 30.



鵜の瀬 この河原で 神宮寺の「関伽井」で汲んだ水を 川に注ぎ 奈良 若狭井に送る「水送り」の神事が行われる
この瀬の中央の所に深い穴があり、奈良若狭井に続いているとの伝説



3月12日 鵜の瀬で行われる水送り神事 鵜の瀬公園資料館パネルより

道路側では車が止められないので、鵜の瀬の直ぐ南の鵜の瀬橋を渡って、白石神社がある向こう側に渡る。
橋を渡ったすぐのところから奥 林の中が、若狭一ノ宮 若狭彦神社・若狭姫神社の元宮である白石神社で、林の奥に小さな社が見えました。境内への入口すぐ横に東大寺建立に尽力した良弁和尚 生誕地の碑があり、その横の川岸には水送り神事の解説や写真パネルなどの展示されている鵜の瀬公園資料館があり、川岸一帯が公園として整備され、駐車場もありました。
そして、川岸の一角には この遠敷川に沿って遡るこの道がいくつかある若狭街道の最短ルートで一番古い古道根来道の古道であるとの案内板がありました。



鵜の瀬公園 2011.8.30. (一部写真はインターネットより)

【 鵜の瀬で目にした関係案内板の記 】



鯖街道根来道
江戸から明治にかけて、若狭湾で捕れた魚介類は、大急ぎで京都まで運ばれていた。
その代表的産物が「鯖」。
ひと塩した鯖は、京都に着くころになると、丁度食へ頃の味になったという。今も小浜、京都間に残る幾筋もの「鯖街道」の誕生である。
ここ根来は、「京は遠ても十八里（現在でいう約72km）」と親しまれた針畑越のルートの一部。
ここから滋賀県朽木村へ抜ける京の都までの最短路であった。

お水送りとお水取り

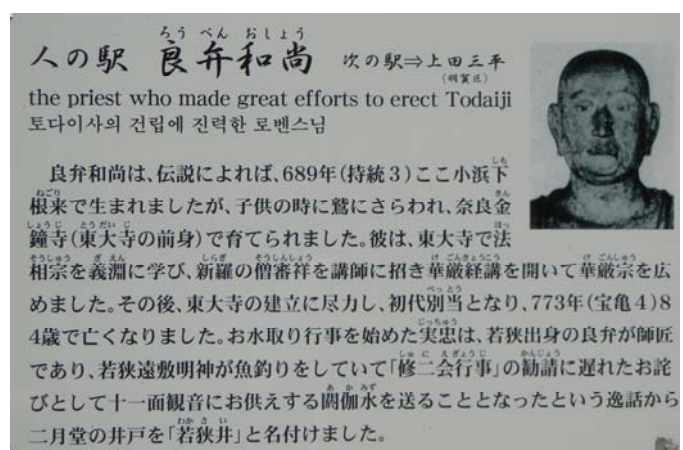
西暦七一〇年、奈良に平城京が造られ、聖武天皇が在位の七五二年春に、東大寺において国家を奉げての盛大な大仏開眼供養が行われました。若狭ゆかりの「良弁僧正」が、その初代別当（開祖）と言われています。

若狭神宮寺に渡ってきたインド僧「実忠」は、その後東大寺に二月堂を建立し、大仏開眼の二ヶ月前から（旧暦二月）天下世界の安穩を願い、一四日間の「祈りの行法」を始められました。「修二会」と呼ばれるこの行の初日に、実忠和尚は「神名帳」を読み上げられ、日本国中の神々を招かれ行の加護と成就を請われたのですが、若狭の「遠敷明神」だけが漁に夢中になって遅れ、三月二日、修二会もあと二日で終わるという日の夜中に現れました。遠敷明神はお詫びとして、二月堂のご本尊にお供えする「閼伽水」（清浄聖水）を献じられる約束をされ神通力を発揮されると地面をうがわり、白と黒の二羽の鵜が飛び出て穴から清水が湧き出しました。若狭の根来白石の川淵より地下を潜って水を導かせたと伝えられます。

この湧水の場所は「若狭井」と名付けられ、川淵は「鵜の瀬」と呼ばれるようになり、古来より若狭と奈良は地下で結ばれていると信じられてきました。その若狭井から「閼伽水」を汲み上げ本尊にお供えする儀式が、大和路に春を告げる神事「東大寺二月堂のお水取り」であり、その神約を護り伝える行事が若狭小浜の「お水送り」なのです。



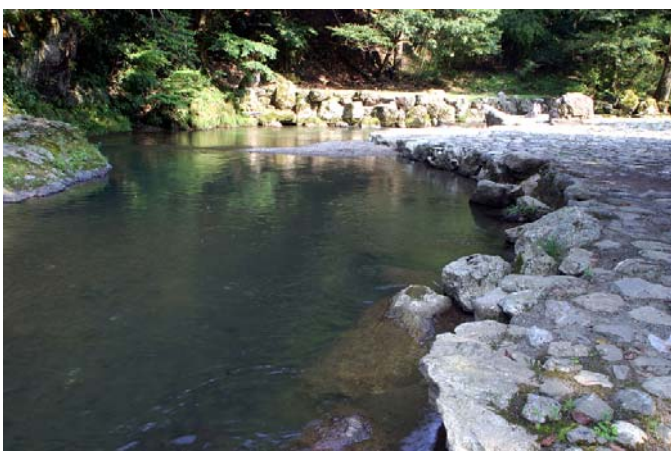
鵜の瀬 鵜の瀬公園資料館にあった奈良東大寺お水取りと若狭 鵜の瀬 の関係を解説したパネル



遠敷神とは若狭一ノ宮 若狭彦・姫神社に祭られている若狭の開拓神のことで、また、鵜の瀬にある白石神社は若狭一ノ宮 若狭彦・姫神社の元宮と言われ、「白石」には新羅の転化との説もあり、対岸の水送り神事の行われる河原に若狭彦・姫神社の境外地がある若狭一ノ宮若狭彦・姫神社の聖地。 また、今回 東大寺を建立した良弁の生誕地であり、しかも、この遠敷にやってきたインド僧実忠が東大寺大仏開眼法要を指導したということも知りました。

この地が遠い昔 1500年前 東アジア交流の真ただ中、多くの文物ばかりでなく、渡来的人也多く往来した国際的な海の玄関口。大陸・朝鮮半島から大和へつながる交流路「和鉄の道」の重要拠点でいたであったことを物語る伝承と思われる。

再度 道路側に戻って 水送り神事の行われる河原に降りる。
とうとう瀬を清らかな水が流れ下ってゆく。 やっぱり 暑い時には水辺がいい。
何とはなしに晴れ晴れ 気持ちのいい鵜の瀬Walkでした。

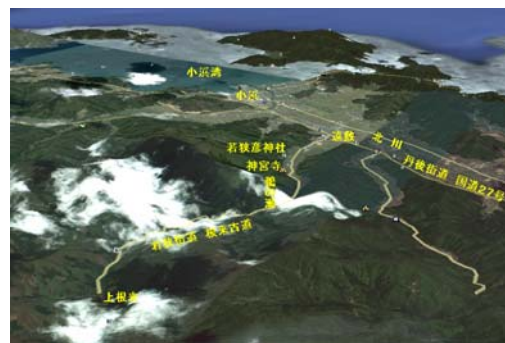


神事が行われる鵜の瀬の河原



橋までもどつてくると浮き輪をつけて楽しそうにこの清流に身を任せて清流下りを遊んでいる親子がいる。ここは格好の川遊びの場所だなあ・・・と。

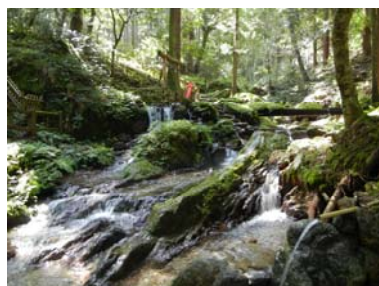
声をかけて、さらに奥へ 峠から朽木へ 車で越えられるか 聞いたのですが、 どうも難しそう。地図では奥の根来まで道が整備されているのですが、峠はどれも怪しそう。 峠が越えられると 昔 芦生の演習林から久多・梅ノ木へ出て、現在の若狭街道・水坂峠越えの道に合流できそうなのですが、難しそうなのでちゃんと調べてからにして、元来た道を引き返し、若狭彦神社に立ち寄って、国道に出て、水坂峠越えの若狭街道を京都へ戻りました。久しぶりに出かけた若狭 walk 気持ちすっきり楽しい walk でした。



人っ子一人いない若狭彦神社のの境内 杉の巨木が立ち並ぶ

若狭一ノ宮のお祭りが 遠敷の街中にある 若狭姫神社移ってしまいなお一層静か

遠く1500年前 若狭がもっとも輝いた時代のロマンを思い浮かべながら歩くにはもってこいの場所でした。



若狭の名瀑 若狭上中 瓜割の滝 2011. 8. 30.

3. 若狭 Walk まとめ

大陸・朝鮮半島から大和へと続く東アジアの文物交流路・和鉄の道

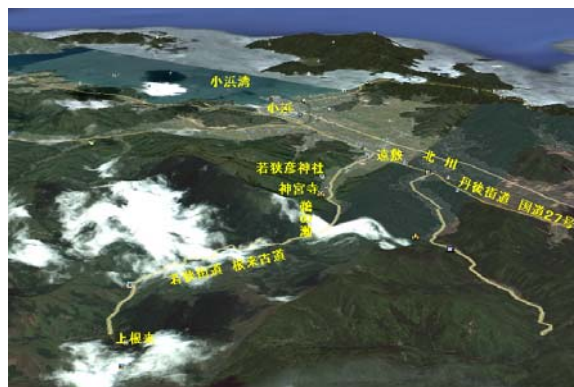
その日本海側窓口 若狭 その実像が見えてきた



古墳時代 朝鮮半島の鉄そして先進文化を求めて、大陸・朝鮮半島との交流が活発に行われていった時代 「大和・畿内の日本海側 玄関口が若狭」と言われながら、日本海側の大陸への玄関口と言えば、北部九州 そして山陰日本海沿岸で鉄を集積した麦木晩田・青谷上寺地遺跡 そして 玉造の出雲・丹後・北陸もある。

地理的には琵琶湖を越えれば大和や畿内の諸国へのルートが確保され、大きな前方後円墳の若狭王の王墓群があるが、特別凄い製鉄関連遺跡もなく、どうも 自分では 日本海側玄関口若狭の実像がはっきりしない。

「若狭が大和の大陸への玄関口。若狭街道で生まれた伝承ではないか。ひょっとして 和鉄の道 鉄との関係があるかも・・・」と軽く再度若狭を訪れたのですが、小浜の古い家並み 小浜港と北川・遠賀川・鳥羽川などの川筋が作る狭い台地をめぐり、遺跡をめぐるなかで、遠い昔 古墳時代半ばから奈良時代にかけて 若狭がもっとも輝いた時代の姿が、具体的に見えてきました。



朝鮮半島の鉄 上中地域の前方後円墳もそうですが、遠敷の地や遠敷川 鵜の瀬の若狭井伝承が生まれた大和との関係 渡来人の足跡を見聞して、この伝承を生んだ若狭の地形 土着の流れが、大和の大陸への玄関口「若狭」を生んだと・・・

そして この道を朝鮮半島の鉄・大陸の先進文化を携えた渡来人そして日本各地の国の人たちがここで出会い、往来。若狭街道の古道 和鉄の道が形成された。

- 季節風が吹きつける波の荒い日本海にあって まるで湖面のような静かな大きな海が広がる巾着型の若狭の湊そして そこから日本各地・大和へは安全な海路・街道が通じている。この地形が若狭繁栄の背骨となった。
- 玉造など特産品製作工具への実用鉄器の必要性から北部九州に全面依存せず、大陸・朝鮮半島と独自接触を進めた出雲・伯耆・丹後・越の山陰諸国
こ日本海交易に着目し、 出雲・丹後・若狭・北陸と山陰の諸国と日本海の交流を続けながら、さらに大きく日本海交易を展開していった大和。
5世紀には 日本海側窓口として「若狭」を一大貿易拠点としてさらに大きく展開した大和と若狭
それが垣間見える上中地域古墳群周辺諸国と大和の古墳築造の変遷
- 大和との強い結びつきを示す前方後円墳 若狭の王墓 上中地域の古墳群とそれらから出土遺物の数々 朝鮮半島系の遺物 鉄製品の数々 横穴石室に見る先進築造技術の取り込み
- 鵜の瀬伝承で知った国際性
この若狭には文化・技術を担った数多くの渡来人が居たのだろう。そして 日本の文化・技術の展開を担って 大和へ登って行った。 その象徴が鵜の瀬かもしれないと・・・

今回の若狭再訪で、1500年前 東アジア交流の真ただ中、多くの文物ばかりでなく、渡来の人も多く往来した国際的な海の玄関口「若狭」と遠敷川 鵜の瀬の伝承がむすびついて、「若狭」の実像が見えてきた。

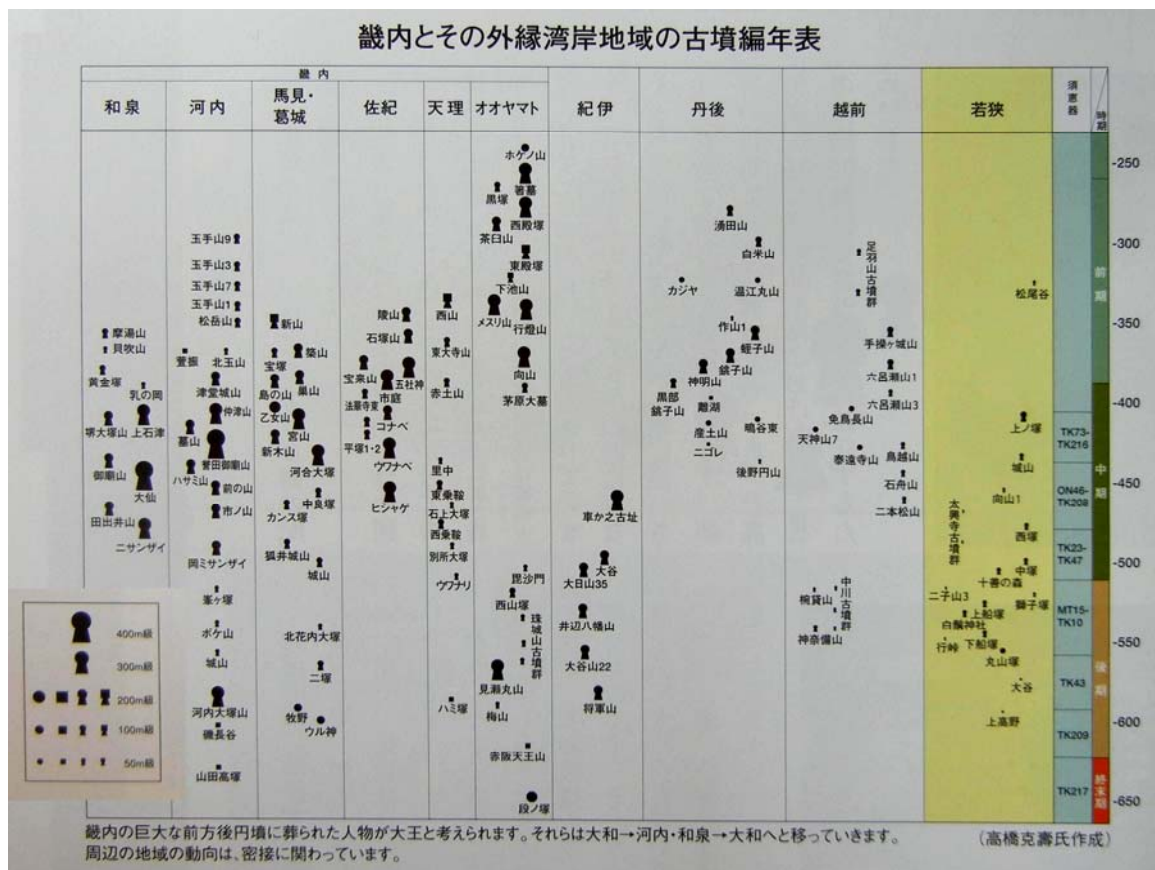
大陸・朝鮮半島から大和へつながる交流路「若狭」の象徴が鵜の瀬。 それはとりもなおさず、古墳時代の「和鉄の道」でもあった。もやもやしていた若狭の実像が浮かび上がってきて 我ながらびっくりです。

今回の若狭 walk で見聞したことや遠敷川流域・鵜の瀬 walk で 解説案内板や見聞したことを再度整理して示してそのまとめとしたい。

1. 古墳時代の大和と若狭ほか周辺諸国の古墳築造年代と形態の変化推移比較図。

若狭ならびに周辺諸国の古墳の大きさや形態の変化から大和との距離感が大きく変化してくる様子がよくわかる。

特に 4 世紀の丹後から 5 世紀若狭への大和との結びつき変化に着目。大和の動きのち密さにびっくり。



2. 鵜の瀬 水送り神事の舞台となった遠敷川流域と その開拓神を祭る若狭一ノ宮 若狭彦神社・若狭姫神社

● 「遠敷・おにゅう」の地名

遠敷は 「おにゅう」と読む。 非常に難解な地名であるが、古代からある由緒ある地名である。

かつて「小丹生」と書いていたともいい、この地が水銀朱との関係があるのかもしれない。

また、「遠敷」の言葉自体には朝鮮語の「ウオンフー」に由来するとの説もある。

● 若狭一ノ宮 若狭彦神社・若狭姫神社の由来 [1] 小浜市のホームページより

若狭一の宮は神社の記録によると、奈良時代初期にあたる養老5年（721）に創建されたといわれています。若狭一の宮は上社と下社の総称ですが、ふつう上社を「若狭彦神社」、下社を「若狭姫神社」と呼んでいます。

彦神社は和銅7年（714）遠敷郡下根来村白石に創られましたが、霊亀元年（715）現在の地に遷社したとされています。祭神は、彦神社は彦火火出見尊（山彦彦）、姫神社は豊玉姫命（乙姫）です。共に、海上安全、海幸大漁の守護神として信仰されています。 — 小浜市のホームページより抜き書き整理

また、若狭の遠敷明神とは この若狭の開拓神 若狭姫(豊玉姫)の神(& 若狭彦(山彦彦))と言われている。

遠敷の里は大和・京との結びつきばかりでなく朝鮮半島諸国とも強い結びつきがあったことがうかがえる。

● 若狭一ノ宮 若狭彦神社・若狭姫神社の由来 [2] 神奈備 <http://kamnavi.jp/ny/wakasa.htm> より

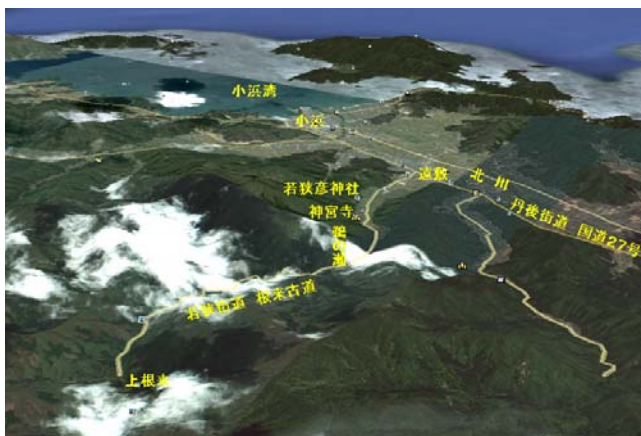
祭神 若狭彦神社 彦火火出見尊、若狭姫神社 豊玉姫尊

由緒 若狭国遠敷郡の式内名神大社で若狭比古神社二座に該当し、元正天皇の勅願により715年に創建されたとい、通称若狭彦神社を上社、若狭姫神社を下社としている。両神は小浜市下根来の白石の里に降臨したと伝わり、白石神社が鎮座している。 降臨の姿としては、唐人のいでたちで、白馬・白雲に居て、白石の上への垂迹であった

神奈備 <http://kamnavi.jp/ny/wakasa.htm> より、一部抜出

● 神宮寺

そして、この鵜の瀬は大和・近江と大陸・朝鮮半島への玄関口若狭を結ぶ最短の若狭古道が通り、若狭への入口に当たる位置にあり、この遠敷の里は大和・京との結びつきばかりでなく朝鮮半島諸国とも強く結びついていたことが強く認識される。



江戸から明治にかけて、若狭湾で捕れた魚介類は、大急ぎで京都まで運ばれていた。

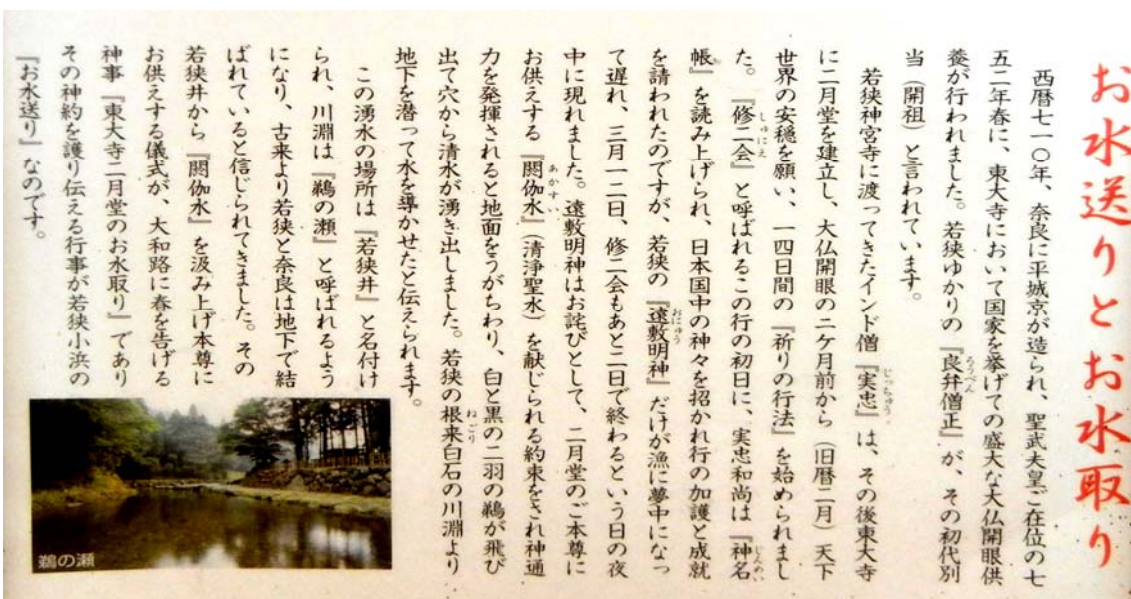
その代表的産物が「鯖」。

ひと塩した鯖は、京都に着くころになると、丁度食へ頃の味になったという。今も小浜、京都間に残る幾筋もの「鯖街道」の誕生である。

ここ根来は、「京は遠ても十八里（現在でいう約72km）」と親しまれた針畑越のルートの一部。

ここから滋賀県朽木村へ抜ける京の都までの最短路であった。

3. 遠敷川 鵜の瀬 お水送りの由来



鵜の瀬 鵜の瀬公園資料館にあった奈良東大寺お水取りと若狭 鵜の瀬 の関係を解説したパネル

